

FUJIEDA ROTARY CLUB

藤枝ロータリークラブ会報

例会：毎週水曜日 小杉苑 藤枝市青木2-35-30 TEL 054-641-3321
事務局：藤枝市青木1-11-10 TEL 054-647-2300 FAX 054-647-2040
URL <http://www.fujieda-rotary.org/> E-mail club1972@fujieda-rotary.org

会長：石垣 善康 副会長：青島 彰 幹事：酒向 謙次 副幹事：大塚 博巳



【シクラメン】

写真提供：事務局

第1883回

<ソング> それでこそロータリー
<ソングリーダー>竹田 勲君



【2010-2011年度 RIテーマ】
地域を育み 大陸をつなぐ
レイ・クリンギンズミス

■ 会長報告 石垣 善康君

本日は、藤枝順心高校インターアクトクラブのメンバーにご出席いただいております。

私も今まで、担当を2回ほどさせて頂きました。年次大会には、浜名湖青少年の家にて合宿を経験し、幹事の時には、主催者の一員として焼津青少年の家の予約を取るために苦労した経験がありますが、いずれも楽しい思い出となっており今でも当時の事を思い出します。

インターアクトとは、若い人たちが、卒業しやがては立派な市民として、又職場や地域社会にあっては、より良いリーダーになって頂くよう期待し、ロータリークラブの事業として青少年奉仕という大きな目標のもとつくられたプログラムです。

最初は1962年アメリカにつくられ、現在では106ヶ国174,200名の会員。

日本では、544クラブ、14,500名の会員が所属しています。

藤枝ロータリークラブは、順心高校ですが、周辺では静岡高校 吉田高校 焼津中央高校がインターアクトの活動を行っております。

インターアクトの心構えとして

- ：指導力と誠実な人格を形成する
- ：他者を尊重し、進んで助ける態度を養うこと
- ：責任を果たし、努力する尊さを学ぶ
- ：国際理解と親善を推進する

となっており、順心高校も、非常に真面目に取り組んでいるとの実感です。

本日は、中部電力様での移動例会です。

少し、電力事情についてお話をさせていただきます。

全国10の会社が日本の電力を支えております。

その比率ですが

原子力 ガス 石炭がそれぞれ25パーセントずつ、残りの25パーセントを水力と石油でまかっています。

石油危機以来バランスの取れたエネルギー源です。しかしその82パーセントを輸入にたよっており、今後ますます原子力発電への以降が必要ではないでしょうか。

ちなみに中国は石炭による発電が77パーセント、エネルギー自給率も99パーセントとなっています。

資源のない国でも、自給率の高い国があります。フランスは、原子力発電が80パーセントとなっており自給率も同様に80パーセントです。

今後の日本のエネルギー源を考え又中部電力様に頑張って頂くことをお願いいたします。

幹事報告 酒向 謙次君

- 2012～13年度派遣 ロータリー財団国際親善奨学生募集要項がガバナー事務所より届いております。
- 2011～12年度ロータリー・クラブ役員の報告についてガバナー事務所より届いております。
- 「国際ロータリー第2620地区2013～14年度ガバナーノミネー候補者推薦の件」と「RI意義ある業績賞」推薦のお願いがガバナー事務所より届いております。
- 国際基督教大学 東ヶ崎潔記念ダイアロハウス

御献金のお願いが日本におけるロータリー平和センターを支援する委員会より届いております。

- ザ・ロータリーアン誌12月号が届いております。
- (財)ロータリー米山記念奨学会より「ハイライトよねやま130号」が届いております。
- 奄美市豪雨災害義援金のお礼が奄美市長より届いております。

出席報告

本日のホームクラブ 出席者	前回の補正出席者
34 / 43 79.07%	37 / 43 86.05%

(1)欠席者(事前連絡とメイクアップをどうぞ)

- 石割君 ○酒井君 ○鈴木寿君 ○仲田廣君
- 萩田君 ○松葉隆君 ○水野君 ○柳原君
- 板倉君 落合君 鈴木邦君 仲田晃君 鈴木舜君

■ ビジター

- 永田 稔君(榛南) 池田 雅彦君(島田)
- 中村 幸夫君(焼津南) 佐久間 三男君(焼津南)
- 中野 強一郎君(焼津南) 山田 壽久君(藤枝南)
- 森竹 正晃君(藤枝南) 玉木 末雄君(藤枝南)
- 松田 康男君(藤枝南) 寺島 弘君(藤枝南)
- 藤木 博明君(藤枝南) 渡辺 哲朗君(藤枝南)
- 藪崎 幸一君(藤枝南) 富澤 静雄君(藤枝南)

スマイルBOX

竹田 勲君

- 結婚記念日にいっぱいバラの花束を頂きました。家内は「とても良い組織に入会した」とめずらしくいっぱい笑顔で帰宅した私を迎えてくれました。皆さんのおかげです。

江崎 晴城君

IAC指導者講習会報告

新世代・IA担当
リーダー

鈴木 勝弘君



2010~2011年度
国際ロータリー第2620地区
インターアクト指導者講習会報告

日時：平成22年12月12日(日)

午前10時~午後3時

場所：静岡県西遠女子学園

【開会式】

点鐘 西遠女子学園IAC 奥村 有紀子

開会の言葉 西遠女子学園IAC 清水 唯代

国歌・インタ-アクトの歌斉唱

(指揮)西遠女子学園IAC 鈴木 里那

来賓祝辞

R I 2 6 2 0地区新世代委員会委員長 中村智次

ロータリークラブの中で、新世代というのは、インターアクトとローターアクトの二つがある。双方とも次世代の指導者を育成することが目的である。インターアクトクラブは、それぞれの学校の先生やロータリアンの指導のもと活動しており、関係者に改めて感謝申し上げる。今後とも、この活動を続けて頂きたい。

もう一つ、**ローターアクトクラブ**ということも覚えておいてほしい。

インターアクトクラブを卒業した後、18歳から30歳の間にローターアクトクラブがある。若い仲間たちで作られているクラブである。**みなさんもこのクラブに継続して参加され、是非、「奉仕の活動」を継続して頂きたい。**このローターアクトクラブはどの地域でも会員が減少しており苦戦しているのでよろしくお願ひしたい。



2780地区インターアクト委員長挨拶

原 郁夫

昨年、2620地区と2780地区が一堂に会し**厚木市の施設で一泊の研修**を開催した。参加者からは、「非常に良い体験をした」と喜びの声を頂いている。この活動を通じて、より多くの仲間作

りができたと思っている。今年度も二回目として、**3月26日から27日の間で開催**する。現在、インターアクトクラブとロータリークラブの合同委員会を立ち上げ、1月9日から検討を開始する。2620地区のみなさんにも、今後会議に参加して頂きたいと考えている。なお、**参加予定者は、各地区100名程度にロータリアン50名を加えた計250名**の参加を見込んでいる。

来賓及び参加RCの紹介

- ・2620地区新世代委員長 中村 智次
- ・2620地区インターアクト小委員会委員長 伊藤 静夫
- ・浜松ロータリークラブ会長 木俣 隆司
- ・2620地区新世代委員 小野田 吉晃
- ・2620地区新世代委員 大村 愛美
- ・2620地区インターアクト小委員会副委員長 鈴木 実
- ・2620地区インターアクト小委員会委員 内田 郁
- ・2620地区インターアクト小委員会委員 池田 龍司
- ・2620地区インターアクト小委員会委員 藤幡 俊量
- ・2620地区インターアクト小委員会委員 佐野 聖
- ・2780地区インターアクト小委員会委員長 原 郁夫

参加IACの紹介

静岡県立沼津称号高校(沼津RC):4名、甲府市立甲府商業高校(甲府南RC):3名、静岡県立静岡高校(静岡RC):4名、大月短期大学付属高校(大月RC):4名、日本大三島高校(三島RC):3名、藤枝順心高校(藤枝RC):2名、聖隷クリストファー高校(浜松北RC):4名、静岡県立吉田高校(島田RC):4名、焼津中央高校(焼津南RC):4名、富士学苑高校(富士吉田RC):4名、日本航空高校(韮崎RC):4名、三島高校(三島RC):7名、加藤学園高校(沼津西RC)4名、静岡県西遠女子学園(浜松RC)32名

ホスト校 校長挨拶

静岡県西遠女子学園 学校長 岡本 肇

静岡県西遠女子学園は、**建学の精神を「婦人の中に未来の人は眠り」**である。揺籃を動かす手は世界を動かす。どんな偉い人、賢人にとっても、最初の教育者は母です。富国強兵・殖産興業という男性中心の社会の明治の世に、創立者岡本巖は、すぐれた母の育成を目指して、私学西遠の最初の種をまきました。

時は移り、余は変わっても、建学の精神は不変の真理です。社会の中で女性の果たす意役割が一層大きくなる21世紀、西遠で育った女性たちが、自分の中に眠る自分を目覚めさせ、次代を担う未来の子供の揺籃を動かす。そして世界が動く、こう考えています。正面に創立者の岡本巖の肖像画がありますが、**「典権(てんが:正しく整って上品なさま)・荘重(そうちょう:おごそかで重々しいこと)」が校訓**です。

歓迎の言葉

西遠女子学園IAC部長 川崎 麻世(略)

挨拶 浜松RC会長 木俣 隆司

私は、先ほどお話のありましたロータリーアクトクラブの出身です。本日の講習会は、**インターアクトクラブについて、またその活動について理解を深め、クラブに帰る成果を還元して頂くこと**です。一人ひとりが機会あるごとに自分の思うところを発言して頂き、そして一人ひとりがよく人の話を聞いて頂き、有意義な一日を過ごして頂きたいと思います。

【講演】

「異文化と共生」

講師 朝日新聞社浜松支局

記者 馬場由美子氏

(講師紹介)

東京外語大学卒業後、朝日新聞社に入社。本社勤務を経て、現在はブラジル人をはじめとする南アメリカ諸国の人々が多く住む浜松で、外国人施設等の取材を担当する現場記者。



(講演内容)

◆浜松への赴任

ポルトガル語で「ボンジーア（こんにちは）」がある。浜松市は日本で一番ブラジル人の多い町です。ここ数十年変わっていません。私は、朝日新聞社の記者をしています。大学での専攻はスペイン語です。1992年に入社し初任地は岩手県でした。東京生まれ東京育ちの私がいきなり東北地方に赴任となりました。東北は、温厚な人が多く助けられました。しかし、頑張って勉強してきた外国語を使う環境ではありませんでした。そんな時、英字新聞の記者をやらないかというオファーがあり、ひとつ返事で引き受けました。

記者活動の中で、日系ブラジル人、日系ペルー人を知りました。外国人も日本人も日系人をよく知らないと思います。これは、2007年5月に浜松に赴任して感じたことです。41歳で東京の英字新聞のポストを捨ててまでも行くのかと周囲の人に言われましたが、言葉を知っている人間が現場で彼らの気持ちを汲み取り発信したいという強い思いで赴任しました。

◆日系人とは

日系人は、1900年代に日本の国策として、日本人を移民として海外に送り出したことが始まりです。農家の次男、三男が海外に出て働きました。これは日本で労働力が余剰気味という状況もありました。しかし、向こうで彼らを待っていたのは劣悪な環境でした。それでも日本人は、「いつか日本に帰る」との思いで一生懸命働きました。1970年代までこの移民政策が行われ、この時すでに日系社会（コミュニティ）が出来上がっていました。

1980年代のバブルで経済的に発展した時期に、浜松市内のものづくり工場では労働力不足に悩まされました。いわゆる3K 職場といわれ労働力が確保できなかったわけです。この時、経済界は労働者を確保するために、外国人労働者を受け入れるように政府に働き掛けを行ないました。政府は、外国人に対しどのような門戸を開くか検討しました。当時の坂中入国管理局局長が日系人はどうかと考えました。日系人の一世、二世は日本語も喋れるし、坂中局長は、かつて日本が移民政策を行なった時に諸外国が日本人を受け入れてくれたのだから、今度は「我々の義務」として受け入れを決め法律が改正されました。これにより労働者に制限のないビザが発行されました。

当時の貨幣価値で、日本円の20万円はブラジルの100万円に相当し、浜松、名古屋、静岡などの地域で、南米人がたくさん働くようになりました。その背景は貨幣価値だけでなく治安が良いこともあげられました。ブラジルでは夜出歩くこともできないくらい治安が悪いといわれています。教育関係も日本はしっかりしています。せっかくなら安全で治安のいい国で生活しようという機運が高まりました。若い世代は家族を形成するようにもなりました。その結果ブラジル人が多く住む町となりました。

しかし、ここに住んでいる日本人とのトラブルが発生しました。各地で、当然と言えば当然ですが、日本語が上手く喋れない人もおり、ゴミ出し、違法駐車、夜中に騒ぐなどのトラブルが絶えませんでした。さらには、強盗殺人やひき逃げが発生しました。事件を起こした人は、母国に帰ってしまい、日本人の怒りは収まりませんでした。日本の警察が手を出せないブラジル人を地元では怖い存在だ、嫌いだという意識が強まりました。

また、新聞報道などもセンセーショナルな記事を書きこれらを煽った気配もあります。しかし、私は、ブラジル人の100%が悪い人間ではないだろうと考えていました。ここまでの私が東京で知っていた日系人です。

現場記者として取り組んだこと

浜松に縁もゆかりもない私が、実態を見て新聞記者として事実を発信しようと考えました。言葉が分かるということも要因としてありました。外国人労働者は社会保険の適用がなく、医者にもかかれなため土日の救急病院にかかり費用を踏み倒すことが多発していました。そのような状況の中、1995年に浜松市の医者、看護師らが力を合わせ、浜松外国人医療連絡会が創設されました。先日、15周年の記念式典が開かれましたが、その時の主催者あいさつでは、創設に向けロータリークラブから資金援助を頂いたとの話がありました。浜松は良くも悪くも外国人との共生の先進地です。

私は、2007年に「デカセギから隣人へ」という特集記事を書きました。その最終回に、南米日系人が日本で働く契機となった改正出入国管理法施行から17年経った時、「デカセギ」として工場に働いてきた日系人も、今は「隣人」として地域の中で暮らしている状況取材し記事にしました。その中で、浜松国際交流協会がポルトガル語の相談員を務める日系二世の三池・アリセ・ミホさんは、最近、家族についての相談が増えたと話していました。特に離婚と養育費の問題だそうです。ブラジルの法律で養育費は給料の30%と決められているが、実際は子供を抱えて生活に窮する女性も多いといいます。生活するために別の男性と同居して、子供が生まれる、男性がいなくなってしまうケースも少なくない。とのこと。これが彼らの実態です。

彼らは、何らかの理由で日本を選び生活しています。私たちは、身近に外国人が住んでいることで彼らを通じてその国を知ることができます。これは恵まれた人的資源であると思います。ブラジルはブリックスと称されるように今後目覚ましい発展が期待されている国です。今から、**ブラジル人のお付き合いをキチンとしなければ、日本人がビジネスでブラジルを訪れたときに相手にされません。これを若い世代から考え行動することが必要です。**

浜松に日系ブラジルで賑わうクラブがあります。

外国人が経営するクラブと聞くと、危ないじゃないか、薬をやっているんじゃないかと心配する人もいますが、ここは、店の内外にガードマンを4人配置し、開店以来、客の喧嘩などで警察が入ったことは一度もない優良店でした。しかし、リーマンショックの余波を受け先日閉店しました。私も何度か取材をしたので、閉店のカウントダウンに参加しましたが、店長は、「また店を作ればいいよ」と極めて「**楽観的で、前向き**」であり、「**どんなに辛くとも人生を楽しむ**」。人生を楽しむことに貪欲なところは日本人が見習うべきところです。

また、浜松市の人権啓発センターが発行している子供向けの絵本「手をつなごう」シリーズに、2008年、初めてブラジル人の少年が登場しました。日本人の少女との友情がテーマで、ポルトガル語や「ミサンガ」と呼ばれる手首飾りなどを通してブラジル文化を紹介し、お互いの言葉や文化の違いを尊重しながら2人が仲良くなっていくストーリーです。外国人をからめた教材があるのも浜松市ならではだと思います。小学校で隣にブラジル人やペルー人がいます。小さい頃から外国を知ることは有意義なことです。「**なんで外国人はこんなに頑張れるんだろう**」と痛感します。

2008年移民の年から数えて100周年の年、各地で様々なイベントが行われました。「**異文化共生**」が根付きつつある証拠でした。私は、これまでの取材を通じて感じたことは**言葉の大切**さです。100周年の行事が6、7月頃行なわれ、その直後にリーマンショックが起こりました。世界全体で景気が減速する中、派遣労働者の解雇が行なわれました。市役所やハローワークは外国人労働者の対応で大変混乱しました。解雇されて辛い状況にある人取材することも辛いと思いましたが、ポルトガル語で挨拶し取材をすると、「**私の国の言葉で話をしてくれるあなたの温かさがうれしい**」と私の取材にも応じてくれました。日本語を喋れないブラジル人もいます。彼ら取材することで本質が見え、特ダネを発信することもできました。

新たな道へ

そんな中、派遣労働者から介護の仕事に従事す

る人もいました。今まで工場で機械相手に仕事をしてきたブラジル人が日本人を相手に介護の仕事をするのです。**ブラジル人は家族を大切に、愛情表現が豊か**ですのでこのような仕事に向いているかもしれません。この方式が浜松では上手くいっています。

国際交流では言葉が重要視されます。ただ、最も重要なのは、「**相手に自分の意思を伝えたいと思う強い意志、あなたのことを聞きたいと思う心**」です。この気持ちがあれば言葉は後でついてきます。私は英字新聞の記者をしていましたが英語圏で暮らしたことはありません。言葉はやる気と根性さえあれば習得できます。若い世代ではやりのツイッターというツールも外国の言葉が話せば世界と交流できます。これは携帯電話と同じです。また、言葉を使って何をするのかという気持ちも大事です。**言葉は「文化」から入ればスムーズにできます。**

是非、若い皆さんも言葉を学んで、異文化と共生してみてください。

【昼休みに西遠 I A C の活動紹介：アカペラ】



【分科会での様子】



【分科会報告】

全体を5つの分科会に分け、各クラブの活動状況 問題点・解決策について意見交換が行われました。

また、分科会の報告では、各クラブとも介護施設への訪問などのボランティア活動などが報告され、**問題点としては部員が集まらないこと**があげられていました。

（西遠女子学園 I A C の活動報告）

以前は部員が少なかったが、現在は38名と大勢の部員となった。この部員に入部の動機についてアンケートを実施したところ、第一位は「**人の役にたちたかった**（小学生の時ボランティアをやり感謝されたことが嬉しかったなど）、第二位は「**友人に誘われて**」でした。

また、2年前に新入生を対象にクラブ紹介を実施したことも影響しているとのこと。**外から分りにくいクラブの活動をどのようにPRしていくかが課題**との報告でした。



（総括： 西遠女子学園 I A C 部長 川崎 麻世）

インターアクトの活動は全体的には募金活動などの社会奉仕活動、エコキャップなどの環境活動、また身体障害者や介護施設での高齢者へのお手伝いなど社会福祉活動が多く見られました。特に高齢者への社会福祉活動は高齢化が進む中で大切な活動で地域に密着した活動で有効だと思います。インターアクトクラブはやはり部員が少ないということが課題です。これはインターアクトクラブ自体が知られていないことがあります。

そういう中で、気楽にクラブに参加してもらえるような工夫が必要なこと、また部員が多くても意識が低い部員がいることもあげられました。こ

これらの対策として強制的に参加させることも一方策だと思います。各クラブにおいて、それぞれの方策を検討し活動を盛り上げていただきたいと思います。

【閉会式】

講評：R I 2 6 2 0 地区インターアクト小委員会
委員長 伊藤静夫

まず朝日新聞社の馬場さん講演では、「異文化共生」という内容で、①特に浜松が先進的に「**異文化**」を取り入れ接し方が上手くいっていること ②ブリックススなど新興国が活況を呈す中で、若い世代においては、**この国の人たちとの交流が重要**であること ③南米人の「**楽観的で前向きなところ**」を学ぶべきなどがありました。

私を感じたのは、いわゆる「**記者魂**」というものです。自らこの地に乗り込んで取材するという強い意志を感じました。言葉の重要性も指摘されました。

また、昼食のアカペラは先日の富士学苑高校でのジャズ演奏・ダンス披露に続き、若い世代の表現力の高さに感動を覚えました。

総括的なことは、生徒が上手く総括でまとめてくれましたが、私からも一言。部員が少ないという問題については、インターネットでの紹介や、人に役立つ活動を展開するなどがあげられていました。これも大事ですが、私は、「**一人ひとりのポテンシャルエナジー（潜在能力）を活かせる活動を展開**」すればと考えています。

それは、**人のためになることも大事ですが、自分の能力を生かすことも同じように大切なこと**です。



現在、ロータリークラブでは、3カ間計画を立てて活動しています。今までのとおり今後とも継続

すべきものは何か、マンネリ化し見直さなければならぬものは何か、こんな観点で取り組んでいます。インターアクトクラブにおいても、クラブ員の能力を活かし継続的な活動が必要なものは何か、例えば、介護施設でのアカペラ公演がこれに該当します。是非とも、自分の能力を様々な場で活かせる活動を展開して頂きたいと思います。

【参加しての感想】

I A C 指導者講習会と聞くと何かやらされるんじゃないかと心配しましたが、主体は生徒さんでした。分科会での話を聞くと、確かに「部員が少ない」「I A C の認知度が低い」など様々な問題点があげられていました。

伊藤静夫委員長の話にあるように、一人ひとりの能力を活かすことが大切なのは十分理解できません。ただ、思うのは、I A C と本家のロータリークラブの関係はどうなのか考える必要もあります。今年の、地区協議会において、渡辺ガバナー補佐は、ロータリークラブもインターアクトクラブの顧問の先生だけに頼るのだけではなく、学校に向いたりして指導してほしいとの気持ちを、ギリシャ神話に例えて話されました。それは、会社の人材育成でよく使われる「**メンター**」という言葉についてです。

メンターとは、部下や後輩を指導・教育し、仕事・ポストを与え引き立てる者を指し、配偶者や家族とは違う立場で、仕事・人生の上で効果的なアドバイスをしてくれる相談者のことをいいます。この、メンターの語源は、ギリシャ神話で、トロイ戦争に出陣するオデュッセウスが息子テレマコスの教育をメンートルという男性に任せ、メンートルはオデッセイの遠征中から成人に至るまで、テレマコス教育したという伝説に由来します。

この由来に基き、今日では、メンターという言葉は人生経験の豊富な人、支援者、指導者、後見人、助言者、教育者の役割を全て果たす人を包括的に意味する言葉として用いられるようになりました。

われわれ、ロータリアンも「社会の目、学校の目に続く第三の目」として、メンターのような役

割を果たすことが必要だと思います。そして、クラブに対しは、常に「近接性」と「補完性」を考え対応していくことが重要だと思います。いずれにしても、新世代のメンバーだけでは対応しきれない部分もありますので、みなさんのご協力を頂きながら進めていくことになりますので、宜しくお願いいたします。

江崎 晴城君



いま、藤枝朝ラーメンが熱い！
新聞、人気テレビ番組ケンミン SHOW やグルメ番組で、不思議な食文化として「藤枝の人は朝からラーメンを食べる習慣がある」と紹介されたことをきっかけに、話題になっています。

なぜ今になって話題になるのか？それは、「まるなかラーメン」を筆頭に、朝3時30分～朝6時30分までのとんこつラーメン店「〇元ラーメン」など、筋がね入りの取材拒否店が多かったため。どこのメディアもアンタチャブルだったのです。

そんななか、ラーメン好きが前述の人気ラーメン店に中毒患者のように通い詰め、味を盗みとり気軽に家庭で食べられるようにと即席めんを開発したのです。

12月17日からしずてつストアや富士屋、田子重など県内で販売が開始されました。次いで洋菓子「こっこ」でお馴染みのミホミからも「藤枝朝ラーメン」が発売される予定です。

発売に先立ち今回ラーメンとともにお渡しした「名刺貼り付け用シール」はFMラジオの人気番組で紹介され、若者の垂涎の朝ラーグッズとなっています。このシールを受け取った方は自動的に「藤枝朝ラー応援大使」に任命されクチコミ力を発揮して朝ラーのファン拡大をしなければなりませんので、慎重に取り扱い下さい(笑)。

「朝ラー」は藤枝が生んだ食文化です。B級グ

ルメをはじめとして全国各地で地域ブランドづくりが盛んになっています。しかしその多くは、焼刃的で歴史の裏付けがありません。

藤枝は、古くからお茶の生産地として有名で、お茶取引などでたいそう早くから仕事を始める、働き者が多くおりました。藤枝のあるところに評判のラーメン屋がありました。仕事帰りに腹ごしらえしよう、と毎日早くから行列ができていました。店主はその行列を見かねて、次第にお店の中に呼び入れるようになり、除々に営業時間を早めていくようになったといわれています。

つるりとした喉ごし麺と日本そばを思わせるさっぱりとしたスープの中華そばは「朝から食べても胃にもたれない」と評判になり、二種類の味を楽しもうと温と冷をセットで食べるのが藤枝流となりました。今では藤枝を中心に朝から営業を開始するお店が多くできています。

近頃、全国的にも珍しく貴重なこの「朝ラー」食文化を守り発信していくことで、従来の勤労で人情にあふれたまち藤枝を取り戻すことを目的とし「NPO法人藤枝朝ラー文化研究会」(通称 朝ラー軒)が設立しました。

昨年の流行語大賞「食べるラー油」に負けないよう、2011年は「朝ラー」を流行語大賞にするのが夢だそうです。

40歳以上は「藤枝」と聞けば「サッカー」を連想しましたが、これからは本当に「藤枝」＝「朝ラー」となる日が来るかもしれません。

(担当/大塚博君)